

第二次世界大戦秘史—日本の原爆計画

日本の原爆秘密

デイヴィド・ディオニシ著

- ・ 連合国は、日本の核兵器計画についての情報を隠蔽した
- ・ ドイツの同盟国日本へのウラニウム秘密輸送がついに解明された
- ・ 70年近くもアメリカの公衆に隠されていた真実

『特に、海軍は、防衛のためだけでなく攻撃のためにも
原爆を開発することを望んでいる』¹ (伊藤庸二大佐)

日本の原爆開発計画については、一般に知らされていないが、それは「新世界秩序」(以下「死の血盟団」とする)の工作者らが積極的に証拠隠滅に動いたからある。実際に、第二次世界大戦中の日本の原爆開発についての情報は、日本では殆んど公開されていない。² これが、戦時下でのドイツの日本へのウラニウム輸送や朝鮮での日本の原爆開発施設の存在をこれまで世間に知られないできた理由の一つである。

死の血盟団は、連合国の占領管理当局を使って日本の原爆開発計画の証拠を隠滅した。その公式理由は、日本が再び 20 世紀の戦場に立ち返ることができないようにすることであった。しかし、この証拠隠滅作戦は、日本の非武装化をはるかにを超えるものであった。

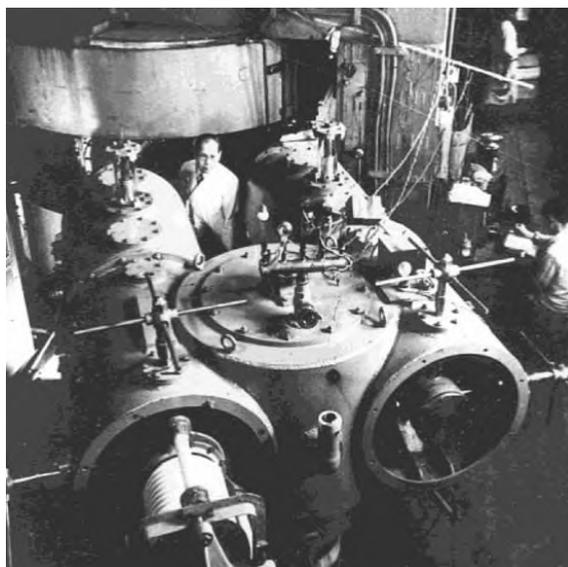
日本における証拠隠滅作戦は、1945～1952年の連合国占領管理下でフリーメーソン要員のダグラス・マッカーサー元帥によって遂行された。1945年9月22日、マッカーサーは、日本の全ての研究実験機関にウラニウムとその他の放射性物質の分離作業を禁止する指令を出した。³



マッカーサー パターソン グローヴズ
日本の原爆開発計画の事実を隠蔽した工作要員ら

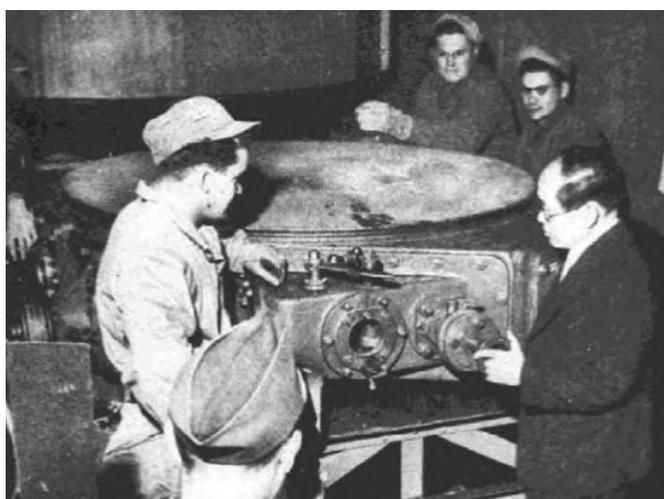
もし 1945 年に日本の原爆開発計画が広く知られていれば、朝鮮は、多分統一国家として残されていたであろう。日本の原爆開発計画の多くは、今日の北朝鮮になる 38 度線以北にあった。日本の原爆開発の主要施設をソビエト連邦へ運び出す作業は、当時朝鮮半島を 38 度線で分断し、更に 1953 年に 38 度線周辺を軍事境界線とすることによって遂行された。

当時米国でソ連に対する懸念が高まる中で、もし日本の原爆開発計画が秘密にされていなかったならば、おそらく朝鮮が分断されることはなかったであろう。米国市民の大多数がソ連に原爆を持ってほしくないと思っていたのに対して、死の血盟団はソ連の原爆開発を望んでいたのである。その結果として、マッカーサーの一般命令 1 号が出された時は、ソ連が日本の原爆開発科学者らとその施設に手を出しても公衆の反対の声は上がらなかった。更に、こうした原爆の秘密を守るために、ソ連が独自の原爆を開発した後でさえ、朝鮮を分断しておくことが重要であった。⁴



日本の原爆開発計画は、大量分光計、コッククロフト-ワルトン加速器、ヴァンダグラーフ起電機、クルジウス管、ローリッツェン検電器、サイクロトロン4台を含む記録された物理的証拠から確認されている。⁵ 上掲の写真は、理研で使っていた日本最大の原爆開発用 60 インチ・サイクロトロンである。⁶

1,945 年 11 月 24 日、米国の占領管理当局は、日本における全てのサイクロトロンを接収した。⁷ これらのサイクロトロンは、爆破器を使って破壊され東京湾に投棄された。⁸ 下の写真は、わずか5日でこのサイクロトロンの破壊を完了した仁科芳雄と米国第8軍工兵隊員を写したものである。^{9,10}



このサイクロトロン破壊の指令は、米国と欧州の物理学者らからの抗議を引き起こした。調査の結果、この破壊指令は、公式には陸軍長官ロバート・P・パターソンにより発令されたのであるが、実際は彼の部下であったと言うレスリー・グローヴズ将軍が出したものであることが分かった。¹¹

日本の原爆開発計画の公式開始は、1941 年 12 月 17 日である。原子爆弾の着想は、それより 7 年早く、東北大学の彦坂忠義教授が原爆製造の可能性を説明する一連の原子物理学理論の論文を発表した 1934 年になされた。

浅田常三郎博士は、原爆製造を論議する 1941 年 12 月 17 日会議のお膳立てを助けた。¹² 浅田博士、仁科芳雄博士、伊藤庸二博士、嵯峨根亮吉博士、渡辺寧博士及び菊池正士博士がこの会議に出席した。¹³

伊藤庸二が会議を正式に開会して云った—「我が帝国海軍が先生方にわざわざお出まし頂きましたのは、他でもなく先生方が本邦物理学研究分野で最高の権威者である故でございます。私は、先生方が当会議の理由を既にご賢察のことと存じますが、我が海軍は、原子力エネルギーを我が国のために開発することを欲するが故に、先生方に本日ここにご参集頂いた次第であります」と。¹⁴ 続けて、伊藤は、米国に対する攻撃と戦争に勝利するために原爆開発計画が裁可されことを説明した。¹⁵

そこで浅田常三郎が発言し、「もしアメリカがそのような武器を開発することになれば、我が国にとって極めて危険であります。従って、私は、既に何人かの皆さんに申し上げておりますように、他ならぬ我が国の自衛のために、先ずは原爆の開発が可能か否かをはっきりせねばならないと思う訳です」と述べた。¹⁶ 仁科芳雄は、伊藤から日本の原爆開発計画を指導してくれるよう云われて、「あなたはそれが如何に大きな仕事であるか分かっておられるのか？」と応答した。¹⁷ 伊藤は答えて云った—「分かっております。我が海軍は分かっております」と。そこで、仁科は云った—「それでは、どれほど金がかかるかも？」。すると、伊藤は答えた云った—「海軍には資金がありますよ」と。そこで仁科は再び訊ねて云った—「と云うことは、海軍には明確に事を進める用意が出来ていると、そう云うことですか？」と。これに対して伊藤は答えた—「海軍は、用意が出来ているばかりか、既に名称までつけてあります。我々は、これを海軍の最優先研究事業と考えていることを先生方に知ってもらいたいのであります。我々は、それをA計画と呼んでおります」と。¹⁸

二号とF号

A計画は、結局、二号とF号と呼ばれた二つの原爆開発計画に分けられた。仁科芳雄は、理化学研究所での二号計画を担当し、¹⁹ 荒勝文策が京都帝国大学でF号計画を率いることになった。²⁰ 1942年10月1日に、仁科博士は、ウラニウムの六フッ化物ガスを蒸留して濃縮ウランを生産する作業を選定した。²¹ これら二号計画とF号計画に従事した主要な科学者は、下表に示した通りである。

Ni-Go Principal Researchers²²

Name	Affiliation	Assignment
Nishina Yoshio	Riken	Project Director
Shinma Keizo	Riken	DFC
Sugimoto Asao	Riken	DFC
Tajima Eizo	Riken	DFC
Tamaki Hiseshiko	Riken	TC
Fukuda Nobuyuki	Riken	TC
1st Lt. Ishiwazari	Riken	CR
Ogoshi Kunitoku	Riken	CR
1st Lt. Sekihara	Riken	CR
1st Lt. Wanibuchi	Riken	CR
2nd Lt. Kawamura	Riken	CR
2nd Lt. Funatsu	Riken	CR
Yamazaki Fumio	Riken	MOIS
1st Lt. Kinoshita	Riken	MOIS
1st Lt. Nakano	Riken	MOIS
Narutomo Takahiro	Riken	MOIS
Asada Tsuneaburo	Osaka Imperial Univ.	MOIS
Ota Takeshi	Osaka Imperial Univ.	MOIS
Ogata Tadachi	Osaka Imperial Univ.	MOIS
Takeuchi Masa	Riken	TDIS
1st Lt. Sachi	Riken	TDIS
2nd Lt. Hoshitaka	Riken	TDIS
2nd Lt. Mori	Riken	TDIS
Sakata Tamio	Riken	TDIS

(略語)
 DFC = 基礎定数の確定
 CR = 化学反応
 TC = 理論計算
 MOIS = アイソトープ分離測定

F-Go Principal Researchers²³

Name	Affiliation	Assignment
Arakawa Bunsaku	Kyoto Imperial Univ.	Project Director
Yukawa Hideki	Kyoto Imperial Univ.	TOAN
Sakata Shoichi	Nagoya Imperial Univ.	Theory of neutron
Enbayaishi Minoru	Kyoto Imperial Univ.	Uranium separation
Kimura Kieichi	Kyoto Imperial Univ.	CM
Shimizu Sakao	Kyoto Imperial Univ.	Isotope separation
Ota Takeshi	Osaka Imperial Univ.	Mass measurements
Basaki Shinji	Kyoto Imperial Univ.	UH
Horiba Shinkichi	Kyoto Imperial Univ.	Nuclear chemistry
Okada Shinzo	Kyoto Imperial Univ.	Uranium extraction
Hagiwara Tokutaro	Kyoto Imperial Univ.	Quality of uranium
Ishiguro Masao	Kyoto Imperial Univ.	Deuteride
Chikami Tetsuzo	Osaka Imperial Univ.	Deuterium
Kanda Eizo	Tohoku Imperial Univ.	Fluorine, oscillator
Enbayaishi Masaharu	Sumitomo Comm.	Fluorine, oscillator
Miyazaki Kiyoshi	Sumitomo Comm.	Fluorine, oscillator
Niwa Yasujiro	Sumitomo Comm.	Fluorine, oscillator
Nitta Shigetaru	Tokyo Meter Corporation	Ultracentrifuge
Takahashi Isao	Japan Radio Corporation	Oscillator circuit

(略語)
 TDIS = 熱拡散アイソトープ分離
 TOAN = 電子核理論
 CM = サイクロトロン測定
 UH = ウラニウム六フッ化物

日本の原爆研究は、京都大学でのサイクロトロン設置に成功したが、あらゆる入手可能なところからウラニウムを入手する必要があった。そこで、先ずウラニウム供給源を北朝鮮に求めたのが、日本の実際の原爆開発施設を日本ではなく北朝鮮に建設した理由の一つである。又、北朝鮮の長津ダムでの発電施設が大量の電力供給に適うことと、更に核爆発実験による放射線被害から日本本土を守るためにもなるとの理由もあって、北朝鮮が原爆開発拠点に選ばれたのである。²⁴

北朝鮮の興南地域に日本の原爆開発施設があったことが、何故日本がその地域の長津に発電所用ダムを建設したのか、又朝鮮戦争の際の1950年11月27日から12月13日にかけての「凍結した長津での戦い」で何故アメリカ軍が不名誉な敗北を喫したのかについて手掛りを与えてくれる。²⁵ この「凍結した長津での戦い」でアメリカ軍兵士らは、F号計画のために建設された興南地域の山岳施設を再発見している。²⁶ この秘密の山岳施設の所在を知ることになった朝鮮戦争での米兵捕虜たちは、1953年板門店での停戦協定の後も帰されることはなかった。彼等は頭を撃たれて射殺され、その頭蓋骨は北朝鮮政府によって保存されていたのである。²⁷

デイヴィド・スネルは、日本の原爆開発計画を進める決定はB-29の出現によっても影響されたと書いている。²⁸ スネルは、ソウルで本国に送還される日本人将校を尋問して日本の原爆開発計画についての情報を得た。その日本人将校は、戦時中に朝鮮での日本の原爆開発計画の防諜任務に当たっていた。米国政府は、スネルに対して当の防諜担当将校の氏名を含む詳細を公にすることを禁止し、スネルは、その日本人将校に若林哲夫の偽名をつけるよう要求された。

スネルは、後日出版物の中で、「日本の原爆開発計画は、当初名古屋で始められたが、B-29が日本本土の工業諸都市を盛んに爆撃するようになって、やむなく朝鮮へ移動させざるをえなかった」と記している。²⁹ 彼は、若林が「自分が思うに、日本を敗北させたアメリカの主要兵器はB-29で……B-29が我が方の原爆開発計画を朝鮮に移動させたのであり、その結果3ヶ月も遅れをとってしまった」と述べたことを引用している。³⁰

日本の陸軍と海軍は、日本、ビルマ、中国でもウラニウムも発見しているが、朝鮮北部がウラニウムの最良供給源の一つであることが分かっていた。しかし、原爆製造には更に多くのウラニウムが必要であった。そこで、ナチス・ドイツが金、生ゴム、阿片、キニーネその他の戦争継続に必要な物資との交換で日本へウラニウムを提供することになったのである。

ドイツのウラニウム運送



ヴェルナー・ハイゼンベルク(左)は、ナチスの原爆開発計画を指導した。^{31,32} ハイゼンベルクは、1941年にコペンハーゲンに出かけて、この開発計画の進行状態を著名な物理学者ニールズ・ボーアと論議した。³³ その後、ボーアは、ハイゼンベルクが彼に語ったことを英国人たちに警告した。³⁴

ナチスの原爆が完成間近いとのハイゼンベルクの言明、即ち長年歴史の中に埋もれてしまうであろう事実があったにも拘らず、1934年には死の血盟団はアドルフ・ヒットラー

に対する影響力を失っていた。その結果、血盟団は原爆開発をイギリスからアメリカに移し直すことになり、結局ニールズ・ボーアが彼等のマンハッタン計画に加わるようになるのである。³⁵ 死の血盟団に仕えていたと考えられるハイゼンベルクは、ヒットラーの原爆開発の進行を阻止したが、高濃縮ウランの日本への輸送を阻むことは出来なかった。ドイツが隠密裏に日本へウラニウムを輸送しようとした事実は、米国政府によって記録されている。³⁶

かのマンハッタン計画は、多分に原爆リトル・ボーイ[訳注=広島に投下されたウラニウム爆弾の形状による暗号名]にナチスのウラニウムを使用したであろうことが推測できる。1945年8月6日に広島上空で炸裂した原爆リトル・ボーイは、ウラニウムの爆弾用濃縮度アイソトープであるウラニウム 235 を使っていた。又、ナチスのウラニウム爆弾開発は、米国が二つの非常に異なる種類の爆弾、即ち 1945年8月に日本で落されたプルトニウムとウラニウムの原爆をどのようにして製造するに至ったかを説明するものかも知れない。

ドイツのUボート U-234 号は、下の写真(左)に示されるように、日本へウラニウムを輸送途中の 1945年5月14日に U.S.S.サットン号[訳注=アメリカ海軍の駆逐艦]に降伏した。^{37,38}

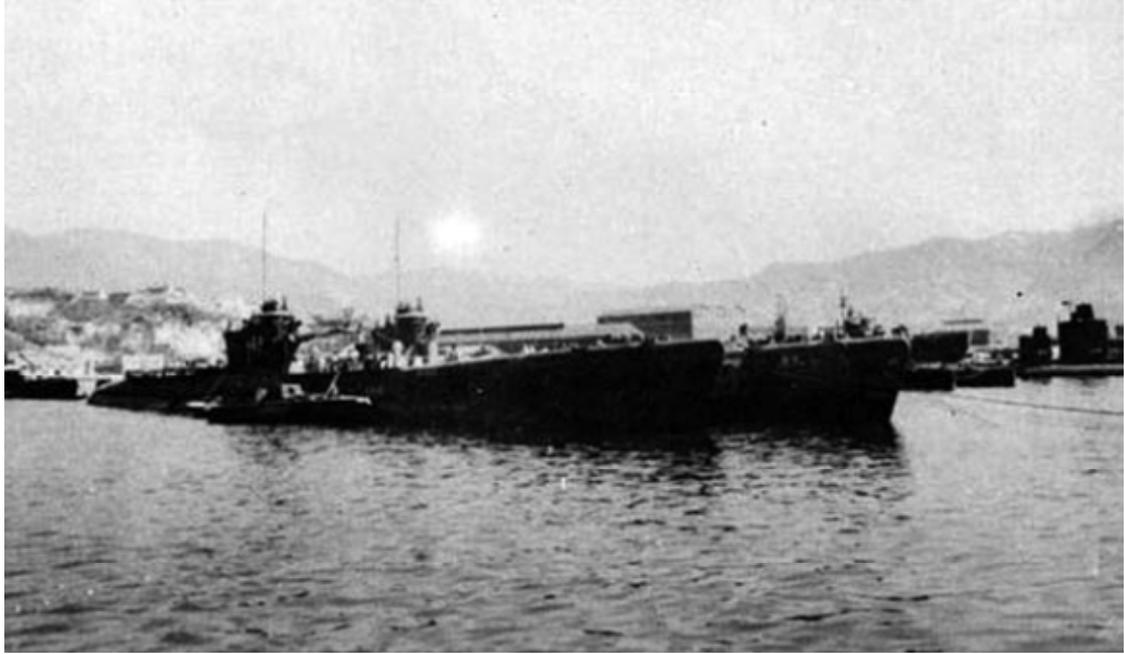


米国政府の公式報告では、ドイツの潜水艦 U-234 号から没収したウラニウムについてはマンハッタン計画当局に報告されただけでロス・アラモス現地へは送られなかったとされている。この公式報告では、ドイツのウラニウムはブルックリンの保管庫に収納され、広島へ投下した原爆には使用されなかったとされている。³⁹

しかし、U-234 号の海上での降伏は、ヨハン・ハインリッヒ・フェーラー中尉によって指揮された同艦が金で裏打ちされた円筒にウラニウムを入れて運んでいたもので、死の血盟団には幾つかの問題を引き起こした。容器を金で裏打ちしたのは、ウラニウム 235 からの放射線被曝を防ぐために必要であったからで、それは米国政府が報告した同艦積荷の不活性酸化ウラニウムの輸送には使われないのである。原子炉で濃縮されない限り酸化ウラニウムは放射線を出さず、従って金で裏打ちされた円筒容器は不活性酸化ウラニウムの輸送には必要ないのであるから、U-234 号の金で裏打ちされた円筒容器の存在は極めて重要である。

ヴォルフガング・ヒルシュフェルト[Wolfgang Hirschfeld]は、当 U-234 の乗組員であった。この直接の目撃証人は、1997 年の出版書『ヒルシュフェルト—Uボートの秘密日記』[Hirschfeld: *The Secret Diary of a U-boat*]の中で、「U-235」とペンキで表記された円筒体に「U-粉末」と表示された積荷を見た」と記している。⁴⁰ しかし、この放射性物質の証拠は、1947年11月20日に U-234 号艦とともに破壊された。上の写真(右)は、この U-234 号がコッド岬の沿岸沖合で USS グリーンフィッシュ号により魚雷で沈められた際に撮られたものである。⁴¹

日本の I-52



写真の日本潜水艦 2 隻のうち 1 隻はドイツ潜水艦 U-530 号から
高濃縮ウラニウムを受け取るために派遣された潜水艦 I-52 号

1944 年に日本の潜水艦 I-52 号がドイツで受け取り日本へ持ち帰ることになっていた酸化ウラニウム 500 キログラムと恐らく一緒に積荷されていたであろう多少のウラニウム 235 に関する秘密は、今日もなお隠されたままである。

I-52 号は、1943 年 12 月 28 日に日本の呉海軍造船所で第 11 潜水艦隊に就役した潜水艦で、燃料補給なしで 300 トンの積荷を 21,000 マイルも輸送できるように設計されていた。上掲の写真は、僚艦 I-53 号と並ぶ I-52 号を撮ったものである。

1944 年 3 月、I-52 号は、宇野甲雄艦長、士官 11 名、下士官兵 84 名と乗客 14 人を乗せて呉港を出発し、途中シンガポールに寄港して生ゴム 54 トン、阿片 2.88 トン、キニーネ 3 トンを積み込んでいる。なお、I-52 号には金 2 トンが積み込まれていたことも、解読された日独間の通信によって確認されている。

I-52 号は、1944 年 6 月 23 日にクルト・ランゲ大尉が指揮するドイツ潜水艦 U-530 号と会合することになっていた。⁴³ この会合の通信連絡がアメリカ軍諜報部によって傍受され、A・B・ヴォセラー大佐が指揮する護衛空母 U.S.S.ボークが両潜水艦を空爆するために急派された。ジェスト・テイラー少佐が U.S.S.ボークから発進して約 55 マイルの海上で I-52 号と U-530 号を発見して攻撃し、日本の潜水艦は被弾してアゾレス諸島の西南 800 マイルほどの大西洋に沈没した。U.S.S.ボークは、ウィリアム・フラッシュ・ゴードン大尉が指揮する次の攻撃機を発進させて、その魚雷攻撃で U-530 号も撃沈させた。⁴⁴

I-52 号と積荷の金の損失は、当時日本のベルリン駐在海軍副武官の藤村義和によって確認された。その際に藤村は、「金を失ったことは辛いがないが、100 人もの水兵たちを失ったことは残念だ」と語っている。

深海沈没船引揚げ作業の専門家ポール・ティドウェルが、国立公文書館で I-52 号が金 2 トンを積み込んでいたことを確認した解禁文書を読んだ後、1995 年に当の沈没艦を見つける作業を始めて現在も続行しているが、未だ金が回収されたとの報道はない。

ソ連による日本の原爆開発施設の接収

興南地方に所在した日本の原爆開発施設周辺は、直ちにソ連と北朝鮮にとって特別厳戒の保護地域になった。ソ連は、米国人員が厳重監視下でなければこの地域に入ることを許さなかったし、当該地域に入れた者でも、その山岳施設に入ることは許されなかったのである。

又、北朝鮮における日本の原爆開発施設の存在は、1945年8月29日に何故ソ連が北朝鮮上空を飛行中の米国機 B-29 を撃ち落したかの隠された理由を伝えるものでもある。⁴⁵ この B-29 は、興南地方の戦争捕虜収容所に食物と医薬品を届けようとして撃墜された。その際、操縦士のジョージ・H・クウィーンズ中尉は、ソ連機の操縦士から着陸を命じられたが、⁴⁶ 着陸地のハムムング飛行場が小さすぎると判断してサイパン島の基地へ引き返そうとしたのである。そこでソ連の戦闘機4機がクウィーンズの B-29 を射撃したが、搭乗員12人は無事脱出してアメリカ軍に救出された。⁴⁷

日本の原爆開発計画は、当時アメリカのマンハッタン計画よりかなり遅れてはいたが、1945年の時点ではヨセフ・スターリンにとって大きな価値があった。スターリンは、死の血盟団に仕えてはいたが、1945年には原爆製造に必要な技術や資材をアメリカから与えられることを確信できなかった。『ジョーダン少佐の日記から』と題する出版書は、死の血盟団要員のハリー・ホプキンスが原爆製造に必要な設計図や資材をソ連政府に受け取らせる手配をしたと記述している。⁴⁸ トルーマン政権はホプキンスを使ってスターリンに国家最高機密である原爆情報を届けたのだと、ジョージ・ジョーダン少佐が暴露したのである。⁴⁹

朝鮮の分断

何故アメリカが朝鮮を分断したかについての公式説明を信じることは、この悲劇が政策意図によるのではなく偶然にそうなったのだ信じることである。下の地図は、朝鮮半島の分断を描いたものである。⁵⁰



こうした偽りを信じるのは、日本が36年近くも朝鮮を植民地支配した事実や1950年に何故国際連合が朝鮮に対する軍事行動を承認したかについて無知だからである。真実は、1905年のポーツマス協定、1945年の朝鮮分断、1950年の朝鮮戦争、1951年のサンフランシスコ条約などが全て死の血盟団に仕える男たちによって策謀されたことである。

1905年、当時の米国陸軍長官で後に大統領になるウィリアムズ・ハワード・タフトが日本の外務大臣と密かに会談した。タフトは、米国を代表する者でありながら「スカル&ボーンズ」[訳注=イェール大学出身者の秘密結社]の一員として死の血盟団に仕える者であった。彼は、日本がアメリカのフィリピン植民地支配を支持することと引き換えにアメリカが日本の朝鮮占領を支持する取り決めを結んだ。この取り決めは、同年後のポーツマス条約で成文化され、セオドラ・ルーズヴェルト大統領によって調印された。その結果、日本は、直ちに朝鮮占領を開始し1910年には朝鮮併合を宣言したのである。

ほぼ全ての朝鮮人が反対した 1945 年の朝鮮分断は、死の血盟団がそこにスターリン主義で孤立主義的な国家を作り上げるために策謀した結果であった。⁵¹ 朝鮮がどのようにして分断されたかについては、偽りの説明が多く、多くの学校で教えられている。学生たちは、第二次世界大戦の終了時にトルーマン大統領の部下らが朝鮮を余り重要視しなかったからだと言明される。更に、歴史本の作家らは、時として、アメリカ政府が当時フィリピンと日本の戦後処理に圧倒されていたので朝鮮の信託統治を引き受けたくなかったのだと説明して、真実を曇らせようとする。こうした解釈は、1945 年にはアメリカが世界唯一の核武装大国ではあったが、スターリンと宥和するために朝鮮が分断されたのだとの説を促すことにもなる。

朝鮮分断について米国政府の公式説明は、二人の軍当局者デービッド・ディーン・ラスクとチャールズ・ハートウェル・ボーンステール 3 世が朝鮮を南北に分断する決定を下すに際してなされた。⁵² 結局、このラスクとボーンステールの分断案は、対日占領管理の一般命令 1 号の一項目として実施された。即ち、この一般命令では、「満州、北緯 38 度線以北の朝鮮、樺太[南樺太]における日本軍の高級司令官と陸・海・空・補助軍の全ての部隊は、極東におけるソ連軍最高司令官に降伏すべし」と規定されているのである。

ラスク文書

ラスク⁵⁴は、米国を朝鮮とベトナムでの戦争に引き込んだ張本人としてよく知られている。又、ラスクは、朝鮮と日本との間に紛争を作り出す 1951 年 8 月 10 日のラスク文書として知られるアメリカの戦略文書をも起草した。⁵⁵

このラスク文書は、日朝間に幾つかの領有権問題を作り出し将来紛争化する種を蒔き、又死の血盟団の最高幹部要員であるジョン・フォスター・ダレスと共同起草した 1951 年 9 月 8 日のサンフランシスコ条約への道を開くものであった。⁵⁶ 死の血盟団のためのダレスの働きは、広範囲にわたり、第一次世界大戦中の戦時産業委員会でバーナード・バルークに仕えたり、カーネギー国際平和基金を理事長として指導したり、或いは 1935 年から 1952 年までロックフェラー財団の理事として活躍したりして、多年にわたり血盟団に尽くした。⁵⁷

サンフランシスコ条約は、対日講和条約とも呼ばれ、1952 年 4 月 28 日に発効した。この条約はサンフランシスコの戦争記念オペラハウスで調印されたが、そこには南北朝鮮のいずれからも一人の代表者も出ていなかった。他の 48 ヶ国もの代表が協定に調印したのであるから、この事実は当の協定が朝鮮に直接係わっているが故に特に注目すべきである。

因みに、ラスクの幾つかの死の血盟団偽装組織との係わりは、彼がローズ奨学生となり 1933 年に血盟団のセシル平和賞を受けるなどした学生時代にさかのぼる。ラスクは、1950 年から 1961 年までロックフェラー財団の理事となり、外交問題評議会の一員でもあった。⁵⁸

世の歴史家らは、三度の世界大戦を引き起こす死の血盟団の秘密計画を知ることもなく、上述のような幾つかの史実が第二次世界大戦後の東アジアにおける領有権紛争の要因ではなかったと誤った結論付けをしているのである。⁵⁹

死の血盟団要員らが戦争を引き起こす憎悪の種を蒔いていることを理解すれば、人々が彼等の罠から逃れられる助けになる。皆が第 3 次世界大戦を起こさせようと策動している本当の敵に注意を集中すれば、領土紛争から身を引くことはより容易になるであろう。

ラスクと共に朝鮮分断戦略を策謀したチャールズ・ハートウェル・ボーンステール 3 世も、ローズ奨学生であり外交問題評議会の一員であった。彼は、1931 年にウェストポイントのアメリカ陸軍士官学校を卒業し、死の血盟団に対する貢献で報賞されて四つ星将官[訳注 = 大将の階級]で退職した。⁶⁰

死の血盟団は、非常に特殊な理由で朝鮮を分断しようとした。まずは、「冷戦」(これはバーナード・バルークの造語であるが)を引き起こすのに役立つことで、これはソ連に原爆を持たせることで可能になった。次いで、第二次世界大戦の終了後も朝鮮に局地紛争を起こさせて米国の軍事費を高く維持することであった。なお、この局地紛争は、38度線以北での秘密を守るためにアメリカの勝利なしで終結しなければならなかった。第三の理由は、朝鮮での基督教の影響を削減することであった。当時、朝鮮を分断することで、平壤を中心に広がっていた基督教を迫害することがより容易になった。北朝鮮での基督教迫害は、公式に無神論主義の首都平壤から広がり 21 世紀にまで続いている。第四の理由は、分断朝鮮が 21 世紀に第三次世界大戦を引き起こさせるアジアでの触媒として役立つであろうことである。

朝鮮の分断に続く初めの三つの狙いが達成された後は、死の血盟団にとっては最後四番目の狙いが 21 世紀に達成されるべく残されているのである。

不必要な戦争

朝鮮戦争への介入が如何にして国際連合で承認されたかについての公式説明は、馬鹿げている。誤りであるが一般に受け入れられている説明は、国連が台湾の蒋介石政権を承認していたことに抗議してソ連が安全保障理事会をボイコットしたと云うことである。ソ連の国連代表は、このボイコットが凶らずも朝鮮戦争への「国連軍」派兵介入の決議に対する拒否権発動を不能にしたのだと主張した。



朝鮮戦争の勃発地点を示す標識

事の真相は、1950 年 6 月 25 日に北朝鮮が南朝鮮に侵入した際に国連安全保障理事会が直ちに開かれて既述のような行動方針を議決したのである。上の写真は、朝鮮戦争の勃発地点を示す標識である。⁶¹

当時ソ連代表団が安保理事会に出席しなかったのは、スターリンがそのように命令したからである。既述のように、スターリンは死の血盟団に仕える者であった。

死の血盟団は、時機を選んで南北朝鮮間に戦争を引き起す諸条件を仕組んだのであった。

デイヴィッド・ディオニシは、平和教育協会[Teach Pease Foundation]の会長であり創立者でもある。彼は、MetLife、Direct Advice、New England Financial の上席執行役員を務めるなど米国や世界各地で平和教育事業を先導しており、アメリカ企業界で活躍する以前は、陸軍情報将校として国家に服務した。

後注

1. トーマス・M・コフィー著、『帝国の悲劇—第二次世界大戦における日本の最初と最後の日々』

[Thomas M. Coffey, *Imperial Tragedy: Japan in World War II, the First Days and the Last Days* (New York and Cleveland, World Publishing Company, 1970)], 244頁、1941年S12月17日の伊藤庸二大佐の発言。

2. 『東京新聞』2012年8月16日朝刊記事、「旧日本軍原爆開発 端緒の報告書 核分裂爆弾へ転用言及」と「挫折した極秘「二号研究」」及び中日新聞社会部編『日米同盟と原爆—隠された核の戦後史』(東京新聞出版局、2013年)第1章「幻の原爆製造1940～1945」を参照。

3. ワルター・E・グルンデン著、『秘密兵器と第二次世界大戦—ビッグサイエンスの影での日本』 [Walter E. Grunden, *Secret Weapons and World War II: Japan in the Shadow of Big Science* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 2005) 199頁。

4. ソ連の最初の原爆は、「最初の雷光」と呼ばれ 1949年8月29日にカザフ共和国のセミパラチンスク実験地で爆発された。このソ連の原爆開発を助けて尤もらしい「冷戦」を引き起こすことが、ヘンリー・スティムソンや他の死の血盟団要員らが日本に対する原爆使用を正当化するために日本の原爆開発計画に触れなかった主な理由である。

5. コフィー著、前掲書、130頁と246頁。80トンのサイクロトロン1台は大阪大学にあった。仁科芳雄博士は、1936年に26インチのサイクロトロンを、1937年に60インチで220トンのサイクロトロンを作った。更に1台のサイクロトロンが1938年にカリフォルニア大学バークレイ校から購入されていた。1940年以後の写真証拠と占領軍による220トン・サイクロトロン破壊の報告書は、日本が原子分離用サイクロトロンを有していた事実を更に確認させるものである。グルンデン著、前掲書、73頁と81頁を見よ。

6. ノースカロライナ州立大学ヘンリー・C・ケリー資料蒐集館[Harry C. Kelly Collection]の承諾を得て転載。

7. グルンデン著、前掲書、200頁。

8. 仁科芳雄、「日本の科学者がそのサイクロトロンの破壊を語る」[Nishina Yoshio, “A Japanese Scientist Describes the Destruction of His Cyclotrons,” *Bulletin of the Atomic Scientists*, June 3, 1947, Volume 3, Issue 6], 145頁と167頁。

9. 同上。

10. 同上。

11. ロバート・P・パターソン[Robert P. Patterson] (1891年2月12日～1952年1月22日)は、米国陸軍長官[The secretary of War](1945年9月27日～1947年7月18日)であった。レスリー・グローヴス著、『今や語りえること—マンハッタン計画の物語』 [General Leslie M. Groves, *Now It Can Be Told: The Story of the Manhattan Project*, New York: Harper, 1962], 367-372頁を見よ。

12. コフィー著、前掲書、243-244頁。コフィーは、次のように述べている—「それは、浅田博士自身が言い出した会合であった。1937年以来、彼は自分の勤め先大学[訳注=大阪大学]での仕事から時間を割き隔月に東京の海軍技術研究所と横浜の海軍航空研究所で軍事転用可能な物理現象と科学発見についての講義を行っていた。彼は、幾度か、ウラニウムから発生可能な巨大エネルギーについて聞知っているドイツのハンス・シュトラスマン[Hans Strassman]のような欧州の科学者たちの発見について語ってくれた」と。

13. 同上、243頁。伊藤庸二博士の海軍での階級は大佐であった。

14. 同上。

15. 同上、244頁。

16. 同上。

17. 同上、246頁。

18. 同上。
19. この研究所は、「理研」としてよく知られており、1918年に民間の社団法人として東京で設立された。詳細情報については www.riken.jp/en/を見よ。
20. 荒勝のF号開発班には、1949年にノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹がいた。
21. グルンデン著、前掲書、67頁。
22. 同上、213頁。なお、主要な研究任務について詳しくは、日本科学史学会編、『日本科学技術史体系 第13巻 物理学』の「第10章 物理学における戦争の投影」（東京、第一法規出版、1970年）、465頁を参照せよ。
23. 同上、212頁。
24. ロバート・K・ウィルコックス著『日本の秘密戦争』[Robert K. Wilcox, *Japan's Secret War*, New York: William Morrow & Company, Inc., 1985]、27頁。長津貯水池は興南の施設に電力を供給していた。長津或いは長津川は、長津貯水池から南へ流れ次に東へ流れる。日本人は、原爆その他の戦時生産事業への電力供給を支えるために興南北方の咸鏡南道に巨大な水力発電施設を設置した。その場所の日本名は興南である。上掲書15-16頁で、ウィルコックスは、第24戦争犯罪調査分遣隊と共に朝鮮で調査活動をしたデービッド・スネル[David Snell]との面談について記述している。スネルは、興南原爆開発施設での警備担当官を含む日本の原爆計画に係わった人たち多数を面接調査しており、何人かの日本人科学者がロシアへ連行されたことを話してくれた。
25. 同上、27頁。日本の原爆開発の主な科学者のうちの二人高橋力造と若林忠四郎はソ連の捕虜となった。
26. 同上。
27. 著者は、1985年の政府報告書で、これらの頭蓋骨が北朝鮮の保管施設に保存されていたとする記述を見ている。
28. デービッド・スネル著、「日本が原爆を開発し、ロシアが科学者たちを連行した」、『アトランタ・コンスティテューション』、1946年 [David Snell, "Japan Developed Atomic Bomb, Russia Grabbed Scientists," *Atlanta Constitution*, 1946]。スネルは、1945年に陸軍に入ったが、その時は『アトランタ・コンスティテューション』紙の編集部員であった。スネルは、ルイジアナ州ミンデンの出身で、陸軍に入る前はマリエッタでコンスティテューション紙のニュース部を任されていた。その後、彼は、第24戦争犯罪調査分遣隊員として朝鮮に行き、そこで日本の原爆開発計画を知ることになり、日本の原爆開発がアメリカの原爆開発とほぼ同程度に進行していて実際アメリカに1年余りの遅れであったと判断したのである。
29. 同上。スネルは、「わたしは、この情報を一人の日本人将校から知らされた。彼は、日本の降伏以前に興南での原爆開発の防諜任務についていたと云い、当時日本の原爆開発計画に携わっていた者たちの氏名、期間、その他諸々の事実と数量データを伝えてくれた。そこで、わたしは、それらの情報をソウルの米国陸軍情報部に報告したので、陸軍省はそれらの多くを保存している」と記述していた。
30. 同上。
31. メリーランド州カレッジ・パークにある国立公文書館II [訳注=首都ワシントンにある本館に対して「新館」とも呼ばれる]、記録グループ77。マンハッタン・エンジニア地区のC・F・フォン・ワイゼッカー[C.F.von Weizsäcker]、捕えられて英国ファーム・ホールに抑留されたナチスの原子物理学者は、「我々がそれ(広島で爆発させたのと同じようなウランウム原子爆弾の製造を完成すること)をしなかった理由は、全ての物理学者が主義としてそうしなかつたからだとは私は信じている。もし我々が本当にドイツが戦争に勝つことを望んでいたのなら、きっと原爆を完成させていたであろう……。間違いなく我々は完成に非常に近い状態であったが、我々は皆、戦争が続いている間は完成させることはありえないと確信していたのが事実である」と打ち明けている。以上発言記録の開示謄本は www.atomicarchive.com/Docs/Hiroshima/Farmhall.shtmlを見よ。
32. ドイツ連邦公文書館(Deutsches Bundesarchiv)の承諾を得て転載。なお、このヴェルナー・ハイ

ゼンベルク写真の撮影者は不明である。

33. ハワード・デイヴィス制作の BBC ドキュメンタリー『コペンハーゲン降下物』 [Howard Davies, *Copenhagen Fall Out*, London, UK: BBC, 2005]。ニールズ・ヘンリック・デイヴィド・ボーア [Niels Henrik David Bohr] (1885 年 10 月 7 日～1962 年 11 月 18 日)は、原子構造と量子力学の解明に基礎的貢献をしたデンマークの物理学者であった。

34. ロバート・ユンク著『千の太陽より輝けり—原子科学者たちの個人史』 [Robert Jungk, *Brighter than a Thousand Suns: Personal History of the Atomic Scientists*, New York; Harcourt, Inc., 1956]。1960 年代に、死の血盟団は米英の諜報機関を使って 1941 年にハイゼンベルクと交わした会話についてボーアを混乱させようとした。血盟団は、ドイツの原爆計画が 1941 年にハイゼンベルクが伝えたほど深刻ではなかったとボーアに信じ込ませようとしたのである。

35. 原爆関係資料館 [Atomic Archive] のホームページ www.atomicarchive.com/Bios/Bohr.shtml を参照。ドイツにおける 1934 年の状況については、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 III 巻『9/11 事件犯人らのオカルト宗教』 [Vigilant Christian III: *The Occult Religion of the 9/11 Attackers* (Bloomington, Indiana: Trafford, 2013), 45-47 頁を見よ。

36. 『ナショナル・ジオグラフィック』 [National Geographic] 1999 年 10 月号所載のプリイト・J・ヴェシリンド著、「最後の D」 [Priit J. Vesilind, "The Last D"]。日本国内の報道資料としては、前掲の『東京新聞』記事と中日新聞社編書 22-25 頁を見よ。

37. 同上(ヴェシリンド著)、134 頁。

38. U.S.S. サットン艦上から一等水兵ハリー・オブライエンが撮った U-234 号の写真(米国公文書館、記録グループ 38)。

39. ヴェシリンド著、前掲書。

40. ジェフリー・ブルックスのヴォルフガング・ヒルシュフェルトから聴取した記録著書『ヒルシュフェルト—U ボートの秘密日記』 [Hirschfeld: *The Secret Diary of a U-boat* (London, Cassell Military Paperbacks, 2000 edition)、初版は 1996 年]、199, 218, 228- 232 頁。ブルックスは、ヒルシュフェルトが「わたしは、「U-235」とペンキで表記された円筒体に「U-粉末」の積荷を見た」と述べたと記述している。

41. 撮影者は不明であるが、この米国政府の写真は U-234 号が 1947 年 11 月 20 日に破壊されたことを示している。

42. 日本人撮影者の氏名は不明であるが、この写真は 1944 年 3 月初旬に撮られたと推定される。

43. ヴェシリンド著、前掲書、119 頁。主要人物の写真と当時最高機密であった攻撃計画については、www.i-52.com を見よ。

44. 同上、124 頁。

45. スネル著、前掲書。

46. ジョージ・クウィーン中尉は、ケンタッキー州アシュランド出身で、ソ連のヤク戦闘機が彼の B-29 を撃墜した時は朝鮮東岸から 10 マイルの地点であった。

47. 無線操作士ダグラス・アーサーは、墜落する B-29 から脱出した後でソ連戦闘機 1 機から射撃されたが辛うじて逃れた。この B-29 の撃墜についてのソ連側の説明は、同機がドイツ機か日本機として誤認されたからだと云う。しかし、この説明は、戦争が既に終結しており、又ドイツも日本も B-29 と容易に誤認されるような航空機を持っていなかったのも無理である。

48. ジョージ・レイスイ・ジョーダン少佐著『ジョーダン少佐の日記より』 [Major George Racey Jordan, *From Major Jordan's Diaries*, New York: Harcourt, Brace and Company, January 1, 1952]、24-26 頁及び

30-38 頁。

49. 同上、5-6 頁、32-35 頁、38-39 頁、86 頁、96-122 頁、235-237 頁。なお、ハリー・ホプキンスについての追加情報は、「注意深きキリスト教徒」著作シリーズ第 II 巻『アメリカのヒロシマを防ぐ』[*Vigilant Christian II: Preventing an American Hiroshima*]を参照されたい。

50. この地図は、南北朝鮮が如何に惨たらしい分断であったかを示している。

51. 朝鮮を分断する 38 度線は、一般命令 1 号によって設定され、南北分断の境界線として 1953 年の朝鮮戦争休戦協定で合意された。

52. デービッド・ディーン・ラスク[David Dean Rusk] (1909 年 2 月 9 日～1994 年 12 月 20 日)とチャールズ・ハートウェル・ボーンステール 3 世[Charles Hartwell Bonesteel, III] (1909 年 9 月 26 日～1977 年 10 月 13 日) は、朝鮮を分割した二人の人物として認められている。

53. 一般命令 1 号は、米国軍部の統合参謀本部によって用意され 1945 年 8 月 17 日に米国大統領によって承認されたものである。そこからの抜粋であるが、「満州、北緯 38 度線以北の朝鮮、及び樺太における日本軍の高級司令官と陸・海・空・補助軍の全ての部隊は、極東におけるソ連軍最高司令官に降伏すべし」とある。

54. ラスクは、1961 年から 1969 年までジョン・F・ケネディ大統領とリンデン・B・ジョンソン大統領の下で米国国務長官であった。

55. 特に日朝間の独島と竹島をめぐる領有権紛争を指す。これらの島嶼は、南朝鮮ではセオ島とドク島と呼ばれる主要な 2 小島とそれら周辺の 3 5 ほどの小島からなっている。これらの島嶼は、日本名では男島と女島と呼ばれている。これら島嶼の歴史的な地図など更なる情報については、<http://en.dokdo.go.kr> を見よ。なお、20 世紀中葉の地図では日本の名称がより顕著であったのは、朝鮮が 1910 年から 1945 年まで日本に支配されていたからである。

56. セオク・リー著、「1951 年の対日講和条約と東アジアにおける領有権紛争」[“The 1951 San Francisco Peace Treaty with Japan and the Territorial Disputes in East Asia,” *Pacific Rim Law & Policy Journal*, 2002]。リーは、127~142 頁で 1951 年 8 月のラスク文書と対日講和条約に至る詳細な情報を提供している。<http://digital.law.washington.edu/dspace-law/bitstream/handle/1773.1/748/11PacRimLPolyJ063.pdf?sequence=1> を見よ。

57. ダレスは、死の血盟団の外交政策協会[Foreign Policy Association]と外交問題評議会[Council on Foreign Relations]の創設者の一人であった。

58. ラスクは、1961 年から 1969 年まで米国国務長官であった。

59. ウィスコンシン大学電子文書資料館所蔵の『合衆国の対外関係—1951 年 VI 巻 アジアと太平洋地域』[The University of Wisconsin Digital Collection, *Foreign Relations of the United States: 1951 Volume VI: Asia and the Pacific*]、1202-1206 頁では、かつて秘密文書であった独島を日本へ譲ることへの韓国大使ユ・チャンヤング博士[Dr. Yu Chan Yang]の強硬な反対論の詳細が記されている。<http://uwdc.library.wisc.edu/collections/FRUS> より <http://digicoll.library.wisc.edu/cgi-bin/FRUS/FRUS-idx?type=turn&id=FRUS.FRUS1951v06p1&entity=FRUS.FRUS1951v06p1.p1220&q1=Emmons> を見よ。

60. ボーンステールは、1966～1969 年に在韓米軍司令官兼国連軍司令官になった。

61. この米国政府の写真は、非武装地帯の南側に立てられた標識を示している。

【備考=以上 [···] 内は訳者の追加挿入である】